

日本学術会議 公開シンポジウム
「新知見の扱いとその活用」

2020年9月10日（木） オンライン

パネルディスカッション
「新知見の扱いとその活用はいかにあるべきか」

吉村 忍

日本学術会議第三部会員・総合工学委員会委員長
東京大学副学長・大学院工学系研究科教授

■ 本来「新知見」が生まれるのは、学術の営み、社会の営みとして当然のこと、自然なこと

■ しかし、未だ見ぬ、未経験の「リスク」に係る「新知見」の発見と、それに対する活用（対応・回避）は難しい

➡ **リスク発見** の問題

■ 発見された「新知見」を活用するかどうか、対応するかどうかについては、いくつものハードルあり

1. 真偽の確認 ➡ そもそも、それが可能か？
2. そこに付随する、ばらつき、不確かさ、（極低・極大被害）確率事象、さらに正規分布ではなく、対数正規分布など
3. 対応にかかる （1）コスト、（2）時間、（3）多くのステークホルダの説得、・・・

■ 正当にリスクを認識できれば、その回避のためにコストを支払える。リスクを受ける人、コストを支払う人の分離問題あり

手段Aのリスク・ベネフィット

手段Bのリスク・ベネフィット

手段Cのリスク・ベネフィット

・

・

手段Xのリスク・ベネフィット

それらから選ばねばならない場合の、選択組み合わせのリスク・ベネフィットを適正化するポートフォリオをどうするか問題